症例番号　①　・　2　・　3　・　4　・　5
心理実践の種類：☑患者への介入　□家族への介入　□医療者支援(コンサルテーション) □その他（　　）

【年代・性別】58歳・男性・京都市在住

必要以上の個人情報が入っている

【原疾患・身体状況】糖尿病・維持血液透析

【介入の契機】糖尿病性腎症による慢性腎不全でX年Y月透析導入となった。Y＋2月、「こんなはずじゃなかった」、「透析に来たくない」と透析中に漏らし、主治医より紹介となった。

【心理実践】透析中に訪床し、話を聴いた。「透析の針を刺す時が痛くてたまらない」、「透析が終わるまでが長すぎるよ」と話された。心理師が「気持ちが落ち込みますか」と尋ねると、「そりゃそうだよ」という答えが返ってきた。心理師はねぎらいの言葉を伝えて、定期面接の約束をした。また、他のスタッフとも情報共有してもいいですか」と尋ねて了解を得た。

定期面接が必要と判断した理由が書かれていない

2回目の面接で、日ごろの楽しみを尋ねると「ナイターをテレビで見てるよ。子供のころからプロ野球好き」というため、「透析中にもスポーツ中継の動画を見て過ごしてはどうですか」と提案した。透析前半はテレビや動画を視聴し、後半は睡眠を取るリズムができ、透析中は落ち着いて過ごせるようになった。一方、透析についての拒否感や気分の落ち込みは続いていた。本人は「どうせ言っても仕方がない」と言いながらも、心理師との面接内容を覚えていたり、他のスタッフに「(心理師は)次はいつ来るの」と話したりする様子が他職種によって観察されていた。

心理師がどうアセスメントしたのかが書かれず、発言の記述に終始している

面接では、40代で糖尿病を指摘されたが治療が断続的になっていたことについて、「なんでちゃんと病院に行かなかったんだろう」と話したり、「こんなことになると思わなかった。早く教えてほしかった」と話したりすることが多かった。透析導入まで単身独居で建築現場で働いていたが、透析導入によって仕事を辞めなくてはならなかったとのことで、経済的な不安があり、何のために生きていけばよいのかという思いが語られるのを支持的に傾聴した。面接を続けていると、「これまで自分の人生をちゃんと考えてこなかった」というようになり、次第に「これからが第二の人生」、「生きがいを持ちたい」と、導入1年後には新しい仕事を始める希望が出てきた。MSWに就職支援機関の情報提供を依頼した。週3日非透析日に働き始め、導入1年半後、継続面接は終結した。

【考察】透析導入期に透析への拒否感と悲観を強めた症例であった。支持的に接する中で、新たな生活への適応と希望を回復しえたと考える。(927字)

文字数が条件を満たしていない